

—(ひと)(暮らし)(ことば)からさぐる—

絵画に見るアイヌ文化の一例

佐々木 利和 (ささき としかず)

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター非常勤研究職員
北海道大学客員教授1948年陸別町生まれ 法政大学大学院修了 博士(文学)
著書に『アイヌの工芸』『アイヌ文化誌ノート』『アイヌ絵誌の研究』『アイヌ史の時代へ—余瀝抄』など。

はじめに

今回は「絵画に見るアイヌ文化の一例」という題をあたえられました。描かれたアイヌ文化の一端を見てみようということのようです。

とはいってもここで扱う絵画作品はアイヌの人びとが描いたそれではありません。異文化びとである和人(シャモ)の手になる作品群です。つまりはシャモ目線で描かれたアイヌのすがたなのです。この種の作品群をアイヌ絵とよんでいます。アイヌ風俗画というひともいますが、アイヌ自らが自分たちの風俗習慣を描写したのではありませんし、シャモ目線での描画です。そこには偏見や差別意識がみられますし、アイヌの人びとのなかにはこんな絵は絶対にみたくはないとおっしゃる方もすくなくはありません。だから風俗画とはいえないのです。

では、どうしてそういうものを取り上げるのか、という疑問もでてきましょう。それは、偏見のなかにも確実性のあるもの、いいかえればアイヌ史の資料として有効な描写があるのではないかという期待をこめて検討したい、という思いからなのです。

蝦夷が描かれたもっとも古い絵は？

ところで19世紀なかば以前、アイヌの人びとは蝦夷とよばれていました。その蝦夷を描いた一番古いものはいつ頃のものでしょうか。図1—1を見てください。

左下に三人の蝦夷が描かれているのですが、わかりますか。古い絵なので絵の具が剥落しています。でも右側と手前の蝦夷は立膝で坐り、左端の蝦夷はあぐらをかいています。三人とも蓬髪でどんぐり眼、腰巻状のものを身に着け、上半身ははだかです。黒い直衣を着た貴人の前にいます(太子ではありません。この場面での太子の存在は不明なのです)。というところは読み取れますね。

これは東京国立博物館にある国宝『聖徳太子絵伝』のなかの一部分です。描かれたのは日本史でいう平安時代のなかば延久元(1069)年で、摂津(現大阪府)の絵師、秦致貞によるものです。このなかになぜ蝦夷が描かれているのでしょうか。『聖徳太子絵伝』は聖徳太子信仰をもとに太子の事績を伝説も含めて絵であらわしたものです。

太子が十歳の時(敏達天皇十<581>年)に蝦夷が兵をあげます。天皇が群臣を集めてどう対処すべきかと尋ねると、群臣は蝦夷を退治すべきと奏上します。天皇は太子にも下問します。十歳の太子は「理を尽くして話せばわかるはずです」と申し上げると、天皇はおさのヤカスらを招き、大和の三輪山に向かい初瀬の川の水で口を濯いで天皇に忠節を尽くしますという誓いをさせました。そのさまを描いたのです。



図1—1
三人の蝦夷(国宝『聖徳太子絵伝』第二面・部分 東京国立博物館)



図1-2 三人の蝦夷がいます。
(国宝『聖徳太子絵伝』第二面・部分 東京国立博物館)



図1-3 さらに拡大しました。
(国宝『聖徳太子絵伝』第二面・部分 東京国立博物館)

ところで聖徳太子を描いたのなら、従者たちの服装が違うではないかというすどい質問が出てきそうです。そうなのです。これは時世粧じせいそうといひまして、絵が描かれたその時代のすがたが表現されています。だから11世紀なかばの公家たちのよそおいなのです。

そして三人の蝦夷のすがた。まず最大の疑問はなぜ上半身はだかなのかです。実は絵師は蝦夷を見たことがない。そして蝦夷は朝廷へ背こうとした。ここで絵師は仏敵である邪鬼を連想したのだと思います。ほぼ

同時代の、興福寺の国宝天灯鬼などの彫刻を思い起こしてください。しかし、蝦夷に関してはわずかながらの情報はあったらしい。それが顔の表現と腰布様の着物に表現されたのでしょう。右側と手前の蝦夷は腰蓑を白い布紐で結び、左側の蝦夷は鳥の羽をつづったものを身に着けています(図1-2、3)。

秦致貞さんはあきらかに畿内の人びとは異なった異文化びととして蝦夷のイメージをとらえた。これが現在に残る最古の、描かれた蝦夷のすがたなのです。

出版物のなかのもっとも古い蝦夷のすがたは？

と、それはひとまずおいて、つぎは日本史という江戸時代の寛文六(1666)年に出版された、絵入り百科事典で、中村揚斎なかむらてきさいが編んだ『訓蒙図彙きんもうずい』の巻四人物部に掲載された図です(図2)。見出しに「東夷とうい」とあり「ひがしのゑびす／図する所 蝦夷なり」と註があります。蝦夷には「かい」と「えぞ」の二つのふりかながあります。東夷は「ひがしのゑびす」ですね。蝦夷の図をみますと蓬髪でくちひげ(髭)、あごひげ(鬚)、ほおひげ(髯)と描き分け、筒袖の着物を右襟に着ており、長着なのだろうか和服のおはしより風にもみえる着方です。渦巻文をおもわせる施文がなされています。短弓を左手にもち、右手は矢筈をとっており、はだしで、腕も足も多毛に描かれています。出版物に載った蝦夷の最古の画例です。くしくも三年後の寛文九年にはシャクシャインが兵をあげました。



図2 中村揚斎『訓蒙図彙』巻第四人物・東夷 寛文六(1666)年 国立国会図書館

それからおよそ半世紀後の正徳二(1712)年に寺島良安によって同じ絵入りの百科事典『和漢三才図会』が編まれました。その巻の十三、異国人物部に蝦夷があらわれます(図3)。見出しに「蝦夷(ゑぞ)」とあり「東夷 獲服(エソ/日高見の国/和名恵曾)」との註があります。そして日本書



図3 『和漢三才図会』巻之十三異国人物・蝦夷 正徳二(1712)年 国立国会図書館

紀などを引用して蝦夷との関係を記します。この中には敏達天皇十年の記事もあります。そして蝦夷の現在の様子を記し最後に蝦夷国語を載せています。例えば「日本人(志やも)之也毛」のように。

ところでここに描かれた蝦夷は構図から見ると『訓蒙図彙』と大きく変わるところはありません。顔の描写もそれほどの違いはありません。しかし、手にしている弓は短弓で、皮を巻いた蒙古風の形状をしています。もっとも大きな違いは着ている服装です。下袴をつけた二部式の衣服でしょうか。筒袖の衣服の上に上衣をつけ帯を締めています。そして脚絆にはだし。なんとも解釈困難に描かれています。18世紀の前半になぜこのようなイメージが流布したのでしょうか。

18世紀なかばから19世紀にかけて描かれた絵は？

さてここからはアイヌ文化と具体的に理解される作品をみてみましょうか。この時期はさまざまな角度からみたアイヌ絵が多く残されています。その中のいくつかの作品をみることにしましょう。

まず図4です。これは村上島之允(秦憶磨とも称する)が編集した重要文化財『蝦夷島奇観』(寛政十二

<1800>年、東京国立博物館)の礼部の一部分です。詞書のはじめに「タフカリ、一にいわくりムセ、一にいわくりポ」とあります。いずれも「舞躍のこと」であるといえますからこの絵はアイヌの踊りの描写です。その語は現在でいうタフカラ(踊りを踊る)、リムセ(踊る)、ウポポ(坐り歌)のことです。地域によってその踊り方は大同小異であるのだと。ここでは詞書の説明が本意ではありません。この絵に注目してください。何かの儀礼の後でしょうか莫産の上には酒をいれたシントコ(行器)とトゥキ(杯と杯台)がおかれ、中央で九人の男女が輪になって手を打ちながらタフカラを踊っています。

奥中央で顔をやや左に向けている女性は伝統衣服であるアットゥシを着ています。このアットゥシには襟、袖口、裾回りに木綿を切り伏せています。この切り伏せには刺繍があるようです。その真向いの後ろすがたの女性も同様のアットゥシです。アットゥシを着ているのはもうひとり。それはむかって右端の男性です。かれのアットゥシは襟、袖口、裾回りは女性のものと同じですが、背に紺木綿の切り伏せ文が縫い付けられています。男の着物と女の着物の違いがわかります。男性はほかに和服の文字散し文小袖や紋付を着ているひとたち三人。うちふたりは前合わせが左前です。

さてこの中に変わった着物を着ているひとが三人います。まず向かって右側、紋付とアットゥシの間の男性です。着ているのは毛皮、それもゼニガタアザラシのそれで仕立てたようです。襟と裾回りに木綿を切り伏せています。こうした皮の衣服をウル(皮衣)とよんでいます。



図4 重要文化財『蝦夷島奇観』(村上島之允、寛政十二<1800>年)部分 東京国立博物館

そして左側。赤い小袖の男性の右に黒い衣服の女性がいます。この衣服をよくみると鳥の羽を綴っているようです。黒い羽根の鳥はというとエトピリカやケイマフリなどでしょうか。鳥の羽の衣服をラプル（鳥羽衣）とよんでいます。そしてその右隣の男性はちょっと素材がわかりにくい衣服を着ています。これはケラ（草衣）といい、草を編んで仕立てたものです。島之允さんはラプルとケラをエトロフ島のアイヌの着物としても紹介しています。「草(キナ)を編んで服とする、鳥獣の皮を裘(ウリ、皮衣)として寒さをしのぐ」のであると。

ここで島之允さんはさまざまな衣服を着たアイヌの人びとがタッカラを踊るさまを描いています。古くから伝承されていた衣服、広くアイヌ文化で用いられたアットゥシ。そしてシャモとの交易で得られた小袖類。ただこのタッカラを踊る様子は実写ではありません。各種の衣服を着た人びとをそれぞれみて記録をしているのですが、かかる光景は見るができなかったと思います。このあたりはかれの創作とっていいでしょう。

ところで、最初の『聖徳太子絵伝』にもどってください。三人の蝦夷の下衣です。羽毛と腰蓑のようなものを身に着けていました。これらはラプルとケラをイメージしたものといえないでしょうか。考えすぎかな。

図5です。これは樺太アイヌが鍛冶をしているところを描いたものの写本です。原本は間宮林蔵述、村上貞助筆録の重文『北夷分界余話』(文化七<1810>年、



図5 川原慶賀筆『樺太風俗図』 鍛冶の図 東京国立博物館

国立公文書館)などの巻之六「鍛冶」部に相当するものです。

オリジナルがあるのになぜ写本を使うの、という疑問がでてくるかもしれません。この写本はあのシーボルトが持っていたもので文政十一(1828)年のシーボルト事件の際、長崎奉行所に押収されたもののひとつです。絵の内容は最上徳内の助言もあるので資料としても有用ですし、原本とは違った味わいがあります。また絵画作品としてもすぐれたものといえます。それをご覧になっていただきたい。

写本の『樺太風俗図』は洋紙に着色された一枚もので六十五枚あります。その絵を入れてある畳紙の表面に題簽が貼られており、それに記された題名が『樺太風俗図』です。描いたのはシーボルトの絵師といわれた川原慶賀です。畳紙の表紙裏に墨書が貼られており、それには長崎で「シーボルトより取り上げた『東鞆記行』より書き抜いた絵六十五枚」と書かれています。そして朱書きで「樺太と西海岸のホルクスメレンキュル風俗画」と追記されています。スメレンクル(ニヴフ)の人びとの風俗画という意味でしょうか。

画面には三人の樺太アイヌの人びとが描かれます。本紙の中央下部にシーボルト自筆の絵の説明があり、右上にはそれを訳した日本語の紙片が貼られています。この絵にはシーボルトさんが「南カラフト/住民が鉄を鍛える図」とドイツ語で記し、和訳は「南カラフト/鍛冶師の図」とあります。和訳は押収時に長崎奉行所あたりでつけたものでしょう。

川原慶賀は長崎の出島に出入りを許されたただひとりの絵師でした。かれはその立場を利用してオランダの画家から西洋画の技法を学びました。この絵にもそれが反映されていて、人物やものには陰影がほどこされていますし、着物のしわなども的確に表現されています。ところで顔の描写ですが、頭は額の上を剃っていますが、うしろ髪はうなじの下まであるやにみえ、またくちひげだけ。耳には耳輪(ニンカリ)をしています。林蔵さんは樺太のアイヌの人びとは蝦夷地と大

大きく変わるところはないけれども、ひげは薄いようだし、うしろ髪も長いようだと語っています。それを踏まえて慶賀さんは描いたのですが、このひげの描写が原本とは異なっています。

この三人ですが、むかって左端の男性は左右の手でふいごを扱っています。木で作った長い筒口を土の塊の中に入れて交互にふいごを上下します。そして筒口の中からでた風が火をさかんに熾おこします。火のかたわらでは槌をあげてやっここで挟んだ赤い鉄片をうっています。その前には仕上がったマキリ（小刀）が横たえられています。林蔵さんはこうした作業に使う材料は船釘ふなくぎなどの古い鉄を用いるのだと説明しています。

中央では男性ができあがったマキリを研いでいます。その傍らには木を削った水桶えびくがおかれています。

かれらが身に着けている着物は林蔵さんのいうデタルベ（テタルペ、レタルペとも。イラクサの内皮からとった繊維で織った樺太の着物）です。襟、袖口、裾回りに紺木綿を切り伏せています。ふいごの男性の肩には丸い模様が切り伏せられています。槌うちの男性の着物は襟の切り伏せが首周りだけで、ちょっと変わった着物になっています。いずれも左襟ですね。

林蔵さんはこのように鍛冶をすることは今の北海道アイヌ文化には絶えてしまったが、昔は鍛冶でいろいろなものを作っていた。そのことはソウヤのおじいさんが詳しく知っていた。今の時代になってシャモ出来の品物がたくさん入るようになったのでその技術が廃れたのだらうと述べています。そしてこの技術はよそからアイヌ文化に入ってきたのではなく、古くからアイヌに伝承したものだらうともいっています。

次の図6です。画面下部にシーボルトがドイツ語で「南カラフト／アザラシの皮とサケの皮によるふいご」と記し、和訳して「南カラフトふいごの鞆おとせいの図／上にあるのは鮭の皮、下にあるのは膾膾膾かひくろの皮でつくる」とあります。原本では「鞆二種」とある図です。林蔵さんは上のふいごは魚皮で風袋（ふいごの風を送る部分）を作っており、風袋の上には板がつけられ、その頭のほ



図6 川原慶賀筆『樺太風俗図』ふいごの図 東京国立博物館

うに木の耳をつけて、そこを握って操作します。また風を送る筒はふたつの木を彫ってはぎ合わせると説明をつけています。林蔵さんが魚皮としていますが、サケの皮とシーボルトさんが書いたのは最上徳内さんの助言によるものでしょうか。

下のふいごはあざらしの皮で風袋を作っています。このふいごを使うときは、まず左手で風を送る筒をにぎり、右手で風袋の開いた部分をつかんで風がもれないようにしながら風袋をねじって風を送るのだそうです。このふいごはかなり古い形態をもっています。

絶えてしまったアイヌ文化の中の鍛冶ですが、このふいごも含めて今日に復元してみたいですね。その作業の資料としてこの慶賀さんの描いた作品は有益であると思います。

なお、この『樺太風俗図』とは別に、オランダのライデン民族学博物館には長崎奉行所に押収されずに持ち帰った慶賀さんが模写した同様の作品が五十枚ほど保存されています。

アイヌ絵のごく一部をみてみました。イメージが強くでている絵とアイヌ文化を考えることのできる作品と。もっといろいろな絵をみたかったのですが、いずれ機会を得られたら、です。